

師範学校の保育者養成機能と音楽教育実践に関する史的研究

保育科 鈴木 慎一郎

本研究の目的は、師範学校の保育者養成機能に関して、音楽教育実践に着目して明らかにすることである。

女子生徒に対して2週間の「保育実習」が義務付けられ、保育者養成の機能増強が図られた1943（昭和18）年の官立専門学校程度へと昇格した師範学校の音楽関係カリキュラムについては、『研究年報』第13号（2008）において発表した。その成果に基づき、2008年度は官立専門学校昇格後の師範学校の音楽の授業で使用された教材に着目して研究を進めた。

具体的には、第一に国定教科書である文部省『師範音楽 本科用巻一』（1943）に掲載されている《夏は来ぬ》の教材分析を行った。その結果については、日本音楽表現学会第6回（ベル・ジーリオ）大会（2008年6月、於：昭和音楽大学）において口頭発表を行い、以下の点を指摘した。

『師範音楽 本科用巻一』における《夏は来ぬ》の1番の歌詞では、『音楽之友』（1942）と同様、「賤の女」ではなく、「早乙女」の言葉が使用された。附録には「優雅ナ伝統的趣味ヲ出シテイル」と記された。

赤井励（2000）の指摘通り、『師範音楽 本科用巻一』における《夏は来ぬ》にはピアノ向けの伴奏が付けられた。

歌唱形態に関しては、《夏は来ぬ》は二部合唱として扱われ、「国民合唱」として掲載された二部合唱と同一の合唱編曲である。

『師範音楽 本科用巻一』の既成の曲4曲中、3曲が国民合唱である。この事実から既成の曲は、「国民合唱」としての側面を強調し、

当時の情勢を反映して選曲されたことがうかがわれる。

第二に、この時期重要視された「日本の音楽」が師範学校においてどのように実践されたかについて考察した。その結果については、日本音楽教育学会第39回全国大会（2008年11月、於：国立音楽大学）において口頭発表を行い、次の点を指摘した。

- ・東京音楽学校、師範学校、国民学校ともに、国民的情操の涵養が謳われ、日本の音楽が利用されていた。東京音楽学校では一部、邦楽の実技の授業が行われていた。それに対し、師範学校では日本音階の音楽理論、日本音楽史、日本音階を含んだ歌曲が教科書に掲載されたに留まり、日本の音楽の実技は実践されていない。国民学校においても同様で、日本の音楽の鑑賞や日本音階を含んだ歌唱教材が教科書に掲載されたに留まる。

このように、保育者養成機能が増強された官立師範学校では、ナショナリズム、ミニタリズムの動向を受けての音楽教育実践であった。各地の師範学校附属幼稚園では、敵機の音等を識別することを目的に音感教育、特に絶対音感の育成に関する保育実践研究がさかんに行われていた。今後は、戦前の音感教育が戦後の幼児を対象としたソルフェージュ指導に及ぼした影響について、戦前戦後の連続性・非連続性の視点からも検証していきたい。